

2015年8月1日（土）2校目

上演12

滋賀県 水口東高等学校

「ミーティングから始めよう！」

第39回全国高等学校総合文化祭
第61回全国高等学校演劇大会

講評速報

生徒講評委員会 担当委員

望月 綾香（北海道登別明日中等教育学校）

村上さくら（大阪府立北かわち阜が丘高等学校）

上野 駆有（三重県立四日市西高等学校）

勢いのある役者たちが織りなす笑いと、舞台の上に満ちる青春の鮮やかさに心を奪われ、終始客席が温かい気持ちに包まれていた。

幕が開くと、小学生のはるなと和輝が椅子に座っていた。滋賀県の小学生が乗る琵琶湖の環境教育船「うみのこ」でたまたま出会い、長い間会うことのなかった2人は、高校生になり同じ演劇部に入部するが、お互いに声をかけられずにいた。その演劇部の3年生にとって最後の公演を終え、上演後のミーティングが開かれる。2年生の部員は、3年生のために楽しいミーティングにして終わりたいと思っていたが、演劇部員が先生の車の鍵をなくしていたことを告白したり、引退する3年生の音響スタッフが舞台装置や衣装と一緒に写真を撮りたいと告白したりと、次々とハプニングが起こる。これを全員で少しずつ解決していく演劇部員の姿が軽快に展開されていた。

演劇部員たちが次々と笑いを繰り返していき、次は何が起こるのだろうと常に心をわくわくさせていた。初めは舞台の上に白い台がひとつあるだけだったが、ポップな音楽が流れ、役者が軽やかにカラフルな箱やフラフープ、テントや猫のかぶり物を続々と持ってきて、それらとともに舞台を所狭しと駆け回る、とても楽しい光景が広がっていった。舞台上で衣装の着替えが行われる横で、ダンスや見ていて楽しいアクションが展開され、テンポよく舞台が進行していった。あえてフリップで状況説明をしたり、顧問の先生が部員にむちゃくちゃな理由で言いくるめられたりといった斬新な演出で、飽きることなく楽しめた。いつ誰を見ても役者一人ひとりが躍動していて、私達は見入ってしまった。

また、鮮やかな色合いだけでなく、告白シーンで差し込む白い光や、最後に部員全員が輪になり微笑みあうシーンでの、役者が光の中に浮かび上がるようなオレンジの光など、落ち着いた照明の表現も綺麗だった。

「グループっていうのは、見えない壁です。」という先生の言葉で、部の中に存在した心の壁が少しずつ取り払われていくのを感じる部員の姿があった。役者とスタッフ、上級生と下級生など同じ演劇部の中で壁が生まれ、衝突が起きていた自分の体験を振り返る講評委員もいた。劇の中では、3年生を喜ばせようとしたり、鍵を探したりと、ひとつの目標に向かって部員全員が奮闘していたが、その様子が、私達演劇部員がひとつの舞台を創りながら心の壁を少しずつなくしていくことに重なるようで、最後のシーンの微笑みがことさらにあたたかさを添えるものとなった。

はるなと和輝が向かい合い、二人の間にある見えない壁を協力して取り払ったとき、さわやかな気持ちが会場を満たした。その二人の純朴な姿や、青春がぎゅっとつまった演劇部の姿が相まって、先生の「出会うことができたなら、それだけで十分奇蹟じゃないですか。」という台詞がじんわりと心に響いた。この滋賀大会での劇や人々との出会いも一期一会と考え、大切にしたいと強く思った。心の壁をなくすことのすがすがしさをたくさんの笑いととも存分に味わわせてくれた水口東高校の皆さんに感謝したい。

